

# と せん も っ き ょ う 渡船から木橋、そしてコンクリートの橋へ

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や  
川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展  
そして未来へ

用語

さくいん



明治42年(1909)、十勝川(当時ライベツ川)の渡船転ぶくによって学校帰りの児童6人が死亡した。写真はその霊をなぐさめるための地蔵尊。(帯広市西21条北5丁目 中島霊園近く)



大正9年(1920)ころの地形図。「橋山栗」と書いてあるのが、栗山橋のこと。(国土地理院所蔵の1/5万地形図「帯広」を使用・着色)



今の札内橋(札内川)。帯広市と幕別町を結ぶ。

舟で川をわたる場合、タイミングが合わないと、待たなければなりません。川の水が増えれば、わたれなくなり。さらに、舟はひっくり返ることがあり、荷物が流されたり、人がおぼれ死ぬこともあり。橋があれば、そうした問題が解決します。しかし、大きな川に橋をかけるには、かなりお金がかかります。

多くの場合、最初は、地元の人々が自分でお金を出したり、集めたりして「私設」の橋としてかけました。そのため、わたるのにお金がかかる橋も多くありました。

また、初めは木材でできた「木橋」をかけるのですが、洪水になるとこわれたり流されたりしやすいという問題がありました。

また、初めは木材でできた「木橋」をかけるのですが、洪水になるとこわれたり流されたりしやすいという問題がありました。

## 札内川にかかる「栗山橋」そして「札内橋」

明治31年(1898)栗山常次郎が札内川に、帯広と札内(幕別町)を結ぶ「栗山橋」をかけました。今の札内橋より、ずっと下流です。

この年、大洪水があり( p186)、栗山橋は流されてしまいましたが、翌年、常次郎はかけ直します。

わたる時は有料で、人は1銭、馬は2銭かかりました。料金の持ち合わせがない人は、浅いところを選んでわたったといひます。明治40年(1907)には国管理の橋になりました。

大正11年(1922)、かけかえられて「札内橋」と名づけられます。その後、昭和32年(1957)、今の場所にコンクリートの「永久橋」がかけられ、さらに昭和61年(1986)、もう2車線ぶんの橋がかかって、今のすがたになりました。

## 十勝川最初の橋「開成橋」

明治38年(1905)、帯広町(帯広市)と音更村(音更町)の7人が組合を作り、現在十勝大橋があるあたりの十勝川に、長さ96mの「開成橋」をかけました。わたる時にはお金がかかりましたが、利用者には大変喜ばれました。

帯広市にある、2万4千年以上前の「若葉の森遺跡」には、音更川下流でひろった黒曜石を使った石器が見つかりま。そのころの人も、当時の音更川合流点の近くで十勝川をわたっていたようです。( p76)

開成橋は、少なくとも2万4千年以上ある「帯広～音更間の十勝川をわたる歴史」の中で、初めての橋なのです。



明治38年(1905)にかけられた開成橋。

(写真:「十勝川写真で綴る変遷」より)

1 銭(せん): 昔のお金の単位。100銭=1円。明治32年(1899)の手紙が3銭、明治35年(1902)の東京で米10kgが1円19銭、明治33年(1900)の東京で映画が10銭。(『値段の明治大正昭和風俗史 上下』より)

2 当時の音更川合流点(とうじのおとふけがわごうりゅうてん): 川の流れは氾濫原(はんらんげん: p46)の中で大きく変わることがあるため、昔の十勝川が今の場所であったとは限らない。

「東洋一」といわれた、初代の十勝大橋 ... 開成橋、河西橋、そして十勝大橋

開成橋は木橋でした。洪水でこわれるたびに修理をくり返していました。

明治43年(1910)、北海道の役所である河西土木派出所が長さ114mの「河西橋」をかけました。かなりがんにょうにつくられた木橋だったのですが、大正8年(1919)には洪水で流されてしまいます。

河西橋は、長さ186mにかけかえられますが、その後も洪水には痛めつけられ、毎年のように修理が続けられました。

十勝にはさらに人が増え、人やものの行き来が多くなります。音更と帯広をつなぐ橋をがんにょうにして、簡単にはこわれないものにする必要性が高くなっていきました。

昭和15年(1940)、長さ369m、はば18mのコンクリート橋(永久橋)である新しい河西橋がかけられ、「十勝大橋」と名づけられました(旧十勝大橋)。当時としては新しい工法が取り入れられ、世界的な名橋として「東洋一」と賞賛されました。

この十勝大橋は、その後55年間、十勝の交通と産業を支え続け、まだまだ橋として活やくできました。

しかし、このあたりでは堤防と堤防の間がせまいために、洪水が流れにくくなっていました。そこで、音更町側の堤防を引いて堤防の間を広げる「木野引堤事業」がおこなわれることになり、これによって、平成7年(1995)、新しい十勝大橋がかけられました。

開成橋、河西橋、そして十勝大橋



明治44年(1911)開通した河西橋。(写真:『十勝国産業写真帖』より)



新しい河西橋(旧十勝大橋)の工事。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)



旧十勝大橋。昭和15年(1940)～平成7年(1995)。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

さようなら旧十勝大橋 ... 今も少しだけ残っている

今の十勝大橋がかかり、それまでの十勝大橋(旧十勝大橋)はこわされることになりました。しかし、55年間十勝の交通を支え、しかも、55年後の車社会になっても充分役割をはたし続け、何より、住民に親しまれてきました。

そこで、平成8年(1996)、住民の会、帯広市、音更町、帯広開発建設部がいっしょになって「さようなら旧十勝大橋」という、お別れのイベントを開きました。

太鼓の演奏があり、子どもたちのフリーマーケットがならび、あるいは、橋にそれぞれの思いを落書きしたりもしました。最後にわたり納めをして、橋に別れを告げました。

今でも、帯広側の橋台(橋のはしを乗せるところ)が残

されています。



「さようなら旧十勝大橋」。わたり納めをする住民。後ろが今の十勝大橋。

3 世界的な名橋(せかいできなめいきょう): 旧十勝大橋は、当時としては最も進んだ技術をさまざまなところで使った鉄筋コンクリート製のゲルバーけた橋(橋げたに関節のようなところがある橋)で、橋脚(きょうきゃく: 橋をささえるところ)と橋脚の間

の長さは当時日本一、橋の面積は当時世界第2位だった。くわしくは、十勝川インフォメーションセンター(帯広市大通り北2丁目 電話: 0155-23-2160 月曜休館)に解説してある。 1 銭(せん): 昔のお金の単位。100銭=1円。明治32年(1899)の手